

め、大手の会社の採用試験に応募した。学科では合格しても、最終的に採用通知を受けることができなかった。

(6) 一流生命保険会社の採用試験では、二十一名の応募者中ただ一人の学科合格者となって、全書類を整えて提出したが撥ねられる結果となった。

(7) 新たに設立されたばかりの会社に入社したが、この会社はまもなく倒産してしまった。

(8) 昭和三十七年に日産自動車株式会社に嘱託として入社し、現在は定年退職し、俗に言う第二の人生を歩んでいる。

こうした人生の重要な期間にブランクが生じ、収入ひいては厚生年金受給等にも大きなマイナスを受ける結果となった。

誠心誠意を持って歩んできた自分が、このような思いがけない障害に阻まれる結果となったことは遺憾なことであったが、当時は社会全般に人権擁護問題として提起するまでには成熟していなかった。

シベリアの思い出

東京都 園部 忍

本籍地、多摩郡砂川二二六番地。園部忍。大正十二年十二月八日生まれ。父、園部己之吉、母、園部アキの次男として生まれる。昭和五年四月一日、砂川小学校に入学。昭和六年、家事の都合で立川町仲町二丁目に移転。昭和六年四月一日、立川第二小学校に転校する。昭和十一年三月、小学校卒業。昭和十一年四月一日、立川第一小学校高等科に入学。昭和十二年十二月一日、立川飛行機株式会社に入社。戦時中なので三月卒業までは学校に籍があるので、会社ではかわりに青年学校の教育を受けていた。家業は精肉店を経営。家族は父と母、長男の兄と長女の姉と次女の姉と次男の自分で、計六人です。

昭和十九年十一月、航空兵で召集令状が来た。十二月一日、四国の松山城の下の部隊に入隊を命ぜられ、

約一カ月松山の部隊に待機する。満州の関東軍の将校が迎えに来た。十二月三十一日、船で下関港を出港する。

昭和二十年元旦、釜山港に上陸する。昭和二十一年一月、佳木斯の満州第八三五部隊一中隊に入隊する。三カ月間、寒い満州で初年兵の教育を受ける。

昭和二十年六月、一等兵に進級する。昭和二十六年月、千振の飛行隊の移動修理に転属。昭和二十八年八月佳木斯の満州第八三五部隊は一中隊にまた帰る。昭和二十年八月十日、ソ連と戦争が始まったので、奉天の本廠に引き揚げると言われて部隊は全部、先発、後発、残留と分かれ、最後の残留部隊は兵舎に火をつけて飛行機で飛び立ったとのこと。後で聞いた話だが、一機は墜落したとのこと。

明朝出発する先発隊が、今夜から馬車で大雨の降っている中を佳木斯の駅へ、食糧をはじめあらゆる品物を運んでいる。一中隊から二名、二中隊から二名、一中隊の二班の班長さんに連れられて、大雨の降る中を歩いて佳木斯の駅に向かった。自分はその中の一人に

選ばれて、真夏なのに冬服に着替えさせられ、自分の物も整理できず出発した。駅の中はごった返していた。自分たちは警備に来たのです。開拓団の家族も一緒。

男は手に銃を持ち、家族を連れて、着のみのままで駅へと歩いていく。夜になって食糧の警備をしていたのだが、雨が降っていて寒いのと眠いので、朝方ついうとうとしてしまった。名前を呼ばれているのに気がついたら、班長さんが呼んでいるではないか。食糧の袋が積んであるのが皆穴だらけに開いてしまっていた。そのときもらったビンタは今も忘れない。朝方、箱型の貨車に乗せられ運ばれた。

昭和二十年八月十五日、ハルビン近くの平房の飛行場でソ連軍の武装解除を受ける。

昭和二十年九月、歩け歩けが始まった。毎日夜になると、どこでも行き当たりばったりで、少しの食糧しか持っていない。薪を集める者、何か食べる物を探す者、野菜を見つけに行く者、その食べ物を少し食べては命をつないでいた。毎日山の中でもどこでもお墓のところでも寝てしまった。早く歩いて行かない

と釜山から船が出てしまうとソ連兵に脅かされて歩いた。一週間かかって百二十キロ歩いたときは一番苦しかった。

それから九月末ごろ、牡丹江の收容所の幕舎に入れた。約一カ月くらいいてから十一月末、貨車に乗せられて北へ北へと連れて行かれた。貨車の中で防寒衣類が渡された。これでは日本へ帰れないと思った。そのごとくシベリアに連れて来られた。ヤクディニヤ捕虜收容所に入れられた。三百五十名くらいだったと思う。皆兵隊ばかり、将校はいない。それから毎日、体力に応じた仕事に分かれた。普通は森林伐採の強制労働をさせられた。栄養失調と寒さで仲間が次々と死んでいった。

昭和二十二年八月二十一日、朝食事前、全員集合がかり、歩いて五百メートルのところの工事現場の近くは湿地帯だから線路が少し高いところにある。その線路から大きな石が落としてある。その石を二個、近くの工事現場へ運べと言われて、どの石が良いかなと選んで、この石がと左手を掛けたとき、上の方から降

りてきた同じ班の者が一遍に二個運べば一回で終わると思って無理したので、一個落としてしまった。その石が自分の左手を掛けた指に落ちてしまい、中指と薬指を骨折してしまった。すぐ收容所に行き、日本人の軍医さんに注射もしないで薬指を切り落とされてしまった。

昭和二十二年から引揚げが始まった。昭和二十三年五月、スイス赤十字を通じてシベリアから赤十字のハガキが一枚日本へ出せた。

「拝啓 永らく御無沙汰致しました。小生、意外の便りにさぞかし驚かれた事と思います。内地の皆様には変わった事と思います。小生もその後元気で居ります。日本軍人として一度死に場所を逃して、恥とは知りながら今後益々健全なる精神と身体を持ち帰り、祖国再建に務める覚悟で居ります。色々と書きたい事がありますが、又。では皆々様に宜しく。御健勝をお祈りいたします。敬具」

一枚のハガキを見て、父母をはじめ皆大喜びしたとのこと。内地では父母をはじめ皆、引揚げ運動の先頭

に立ってやってくれたとのこと。

七月、帰国のためヤクディニヤ收容所を出る。八月、ナホトカ港の收容所に入る。昭和二十三年八月二十二日、ナホトカ港を出発。栄豊丸に乗って八月二十四日舞鶴港に上陸、復員する。八月二十六日、家に電報を打つ。八月二十八日、立川の実家に帰る。立川駅に着くまで、家があるのかわからなかった。また父母兄弟が丈夫かも何もわからなかった。皆、丈夫、元気で迎えてくれて安心した。

シベリア抑留記

新潟県 田 中文 平

終戦時は、北朝鮮三十八度線以北の元山海軍航空隊に戦務いたしておりました。終戦の詔勅は聞こえておらず、翌朝、当直将校が、「日本は昨日一時停戦となった、志願兵は居残って残務整理、その他の兵は即時解散、各自の故郷へ帰るように」と報告。兵隊は真相

がさっぱり分からず隊内は動揺していた。

二十二日早朝、見張りの兵が海に軍艦が多数見えると報告、最初はアメリカの軍艦が艦砲射撃に來たと思ひ、各陣地に戦闘準備が発せられた。機銃に弾を込めて臨戦態勢に入った。しばらく待機したら、軍艦より上陸用舟艇五、六隻、波をけたてて港に向かつてくる。先頭の船には赤旗と白旗を立てて軍使らしき将校数名、武装解除の打ち合わせに來たのだ。

翌日、飛行場へ武器弾薬全部並べてソ連軍の武装解除を受ける。やつと戦争に負けたのだという実感でひしひしと胸にこたえた。

以後、ソ連抑留者としての運命を辿る。航空隊に一週間ぐらい監禁生活、日本より迎えの船が來たので出発とのこと。内地は敗戦のため、食料も衣服もないので、みんな持てるだけ持つようにと隊の倉庫を解放、各自背に背囊、両手には持てるだけ欲張って、やつと歩くような姿で航空隊を後にした。

さて、いくら歩いても港が見えてこない。これは変だとソ連の番兵に聞くと、船はもう一つ向こうの港に